

古墳時代の前田遺跡

これまでの調査成果から、前田遺跡では古墳時代前期から中期にかけて、恒常的に人が住み続けていたことが分かりました。遺跡からは播磨地域以外の土器が出土しており、他地域との交流が行われていたことが分かります。また、集落から少し離れた井戸では、初期須恵器や玉類などを用いた祭祀が行われていたようです。こうした特徴から、前田遺跡はその当時の周辺地域における拠点的な役割をもつ大集落であったと考えられます。

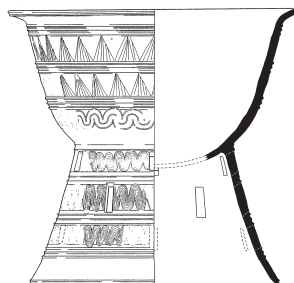
また、初期須恵器が数多く出土していることや早い時期から^{かまど}竈を備えた住居が造られるなど、渡来人との関係を窺うことができ、先進的な技術をいち早く取り入れた集落であったことが分かります。

出土した珍しい遺物

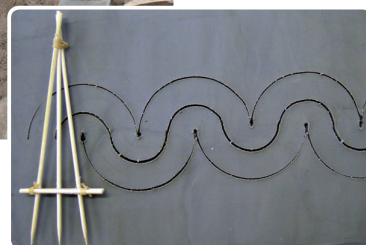
コンパス文器台（初期須恵器）

前田遺跡からは、多くの初期須恵器が出土しました。中でも特筆すべきはコンパス文が施された器台です。器台とは壺などを乗せるための台のことで、この模様を持つものは日本で20～30例ほどしか発見されていません。形が完全に分かるものは片手で数えるほどしか見つかっておらず、復元するとほぼ完全な形となるものは国内有数の貴重な資料です。

また、コンパス文を持つ土器は朝鮮半島でも見つかっており、渡来人の足跡を辿るための重要な資料です。

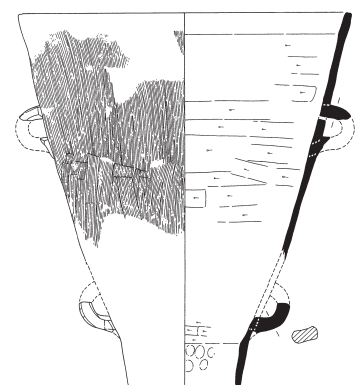


【参考】田井中遺跡（大阪府）出土



山陰型甑形土器

山陰地方に多く見られる大型の土器です。特殊な形状をしており、広い方を上に向けて甑（蒸し器）のように使用していたのか、狭い方を上に向けて竈の煙突のように使用していたのか、その用途は未だ明らかになっていません。



【参考】東南遺跡（太子町）出土



【参考】西木ノ部遺跡（西紀町）出土

石製品（玉類・有孔円板）

白玉や管玉など、装飾品である玉類が井戸の中から出土しました。祭祀に使われていたものと考えられます。また、鏡を模して造られたマツリの道具と考えられている、有孔円板という穴が二つ穿たれた石製の円板も出土しています。



令和元年 10月20日(日)

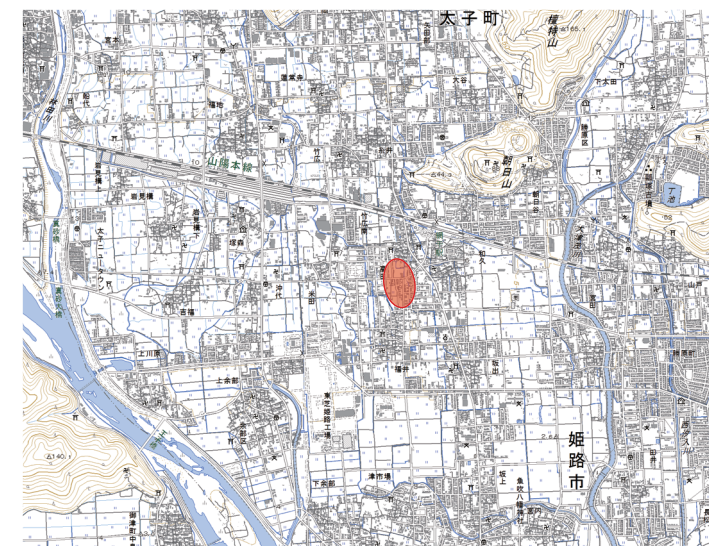
前田遺跡 10区 7-D区 現地説明会資料



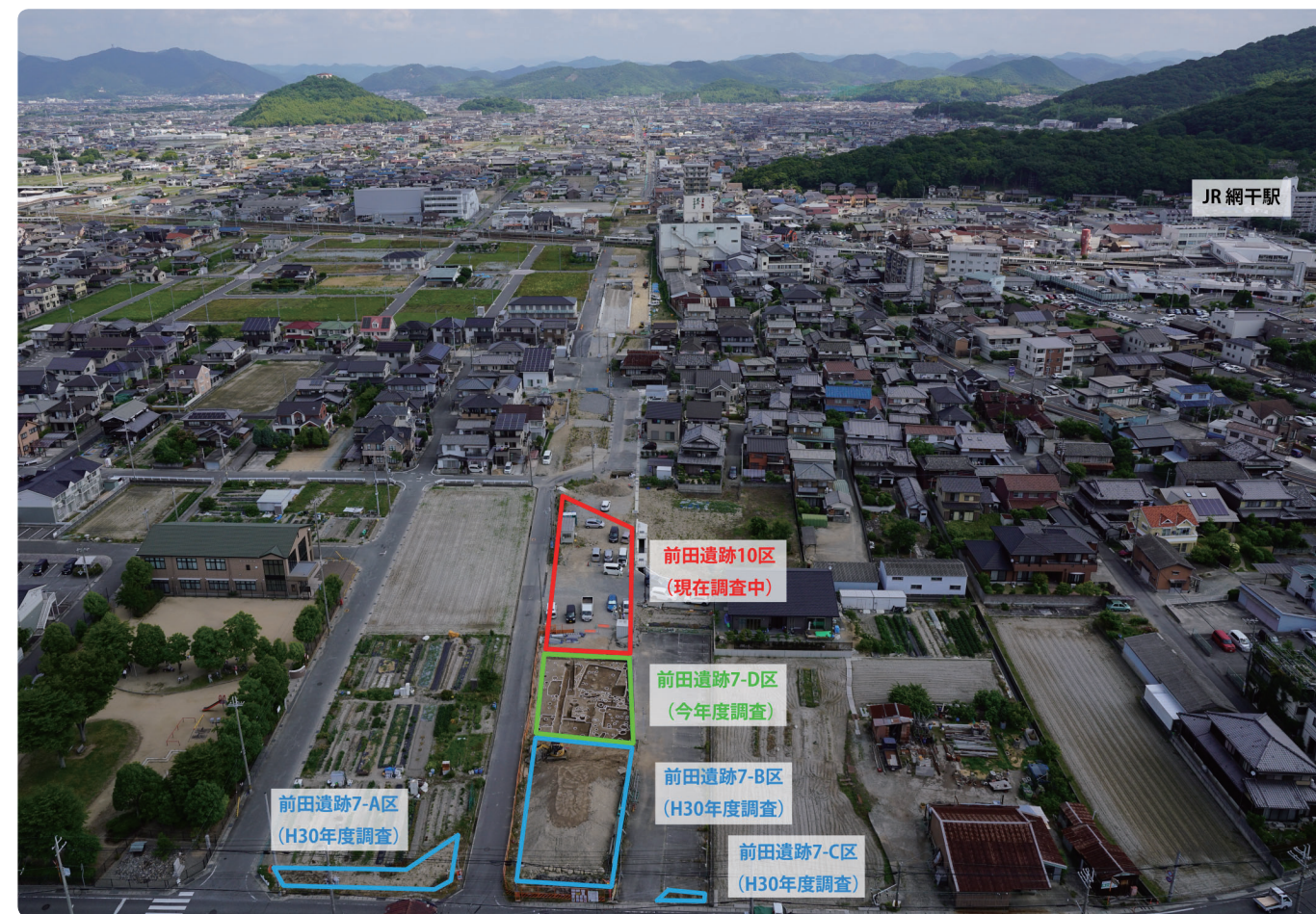
～はじめに～

前田遺跡は姫路市網干区高田に所在する遺跡です。兵庫県姫路土木事務所が計画する（主）太子御津線社会資本整備総合交付金事業に伴って、（公財）兵庫県まちづくり技術センターが兵庫県教育委員会の委託を受け、平成28年度から発掘調査を行ってきました。

今回は、5～6月に実施した調査区（7-D区）と、現在発掘調査を進めている調査区（10区）の成果について、ご紹介します。



前田遺跡の位置（1/50,000）



南上空から見た前田遺跡

兵庫県教育委員会

公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
Hyogo Construction Technology Center for Regional Development
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町 1-1-1 兵庫県立考古博物館内
URL: <http://www.hyogo.ctc.or.jp>

令和元年度の調査成果

古墳時代の井戸

住居のある場所から少し離れた所につくられた、径約2mの井戸です。中からは、初期須恵器の器台や礎、土師器の甕・甔・高坏など、様々な土器が大量に出土しました。底の方には、コンパス文が施された器台がほぼ全体の形を留めて埋もれていました。

他にも白玉や管玉なども出土しており、最後には細かく砕かれた土器のかけらや河原石が意図的に埋められていることから、祭祀が行われていたものと考えられます。



備前焼の甕が据えられた土坑

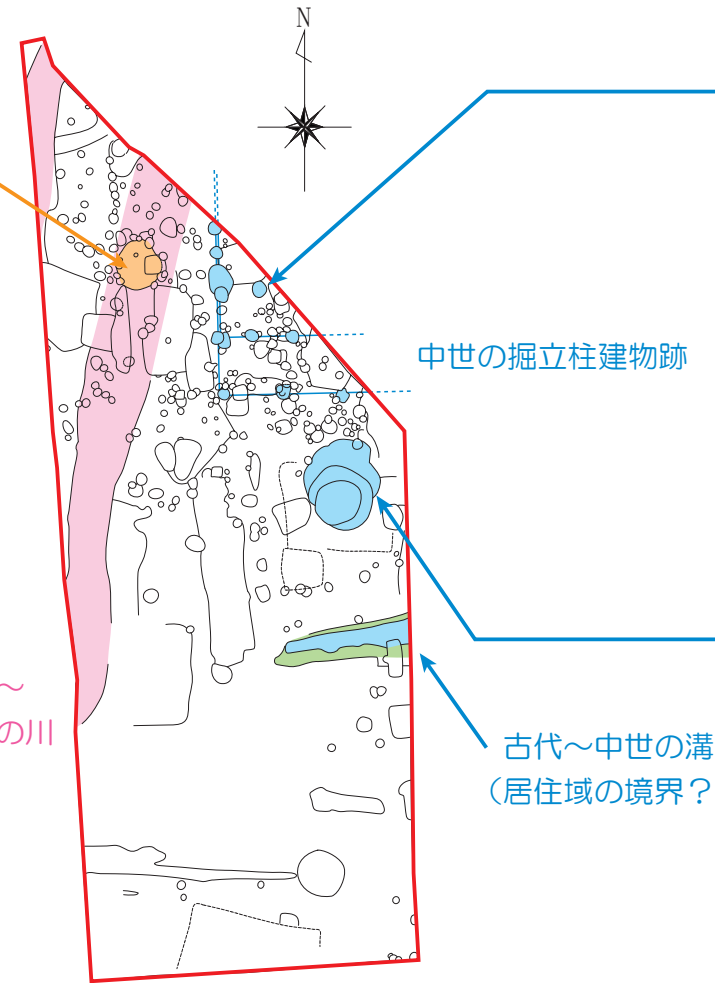


中世の石組み井戸



10-A区
(現在調査中)

弥生時代中期～
古墳時代初頭の川



中世の掘立柱建物跡

古代～中世の溝
(居住域の境界?)

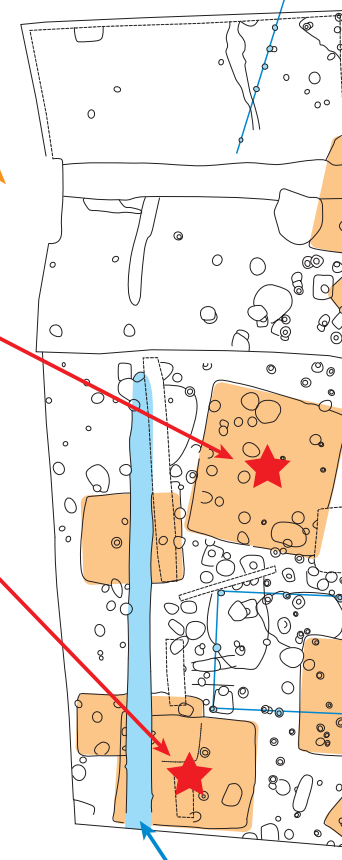
古墳時代の竪穴住居群

今年度の調査では、古墳時代の竪穴住居跡が10棟見つかりました。これまでの調査成果を合わせると、調査範囲内だけでも、見つかった竪穴住居跡は30棟近くにのぼります。これらの住居は古墳時代前期から中期(4～5世紀)の間に建てられたもので、集落が長期間にわたって営まれていたことが分かります。



中世の柵列?

10-B区
(8月末～9月に調査)



7-D区
(5月～6月に調査)

中世の掘立柱建物跡

古代の掘立柱建物跡
(大型の建物?)

中世の溝
(館などの境界?)

0 10m
1/300

多くの土器が出土した古墳時代中期の住居

一辺約6mの大型の住居跡からは、コンパス文器台の破片や30点を超える大量の土師器の高坏が出土しました。また、製塩土器の破片や黒色研磨土器も出土しています。

山陰型甔形土器が出土した古墳時代前期の住居

「山陰型甔形土器」と呼ばれる土器をはじめ、日本海沿岸地域に多く見られる特徴を持つ土器が出土しました。



奈良時代以降の前田遺跡

方形で大きな柱穴が7-D区の東端で並んでいることから、奈良時代には大型の掘立柱建物が建てられていたことが分かります。

中世には、東西や南北に設けられた溝によって土地が区画されていたようです。7-D区で見つかった南北方向の溝は、昨年調査成果とあわせると、館などの敷地を区切る溝であった可能性が考えられます。また、井戸や数多くの柱穴が掘られており、人々の生活の跡が窺えます。これらの柱穴からは3棟の掘立柱建物が復元できました。

その後、当地は耕作地として現代に至るまで利用されていたようです。